

① 出典『食を料理する』では、効率を追求した結果生じた無駄や失われていくものについての問題が取り上げられています。私たちにとってありふれた「食」をテーマにしながら政治・経済といった社会的次元にまで考察が拡大され、出題箇所では、「食」と「環境問題」についての関わりが書かれています。

問一 線(1)の前を見ると、「そういう」という語に気づきます。「そういう」が指す、10行目の「地域を越えて人類全体の生存の危機とストレートに結びつけて考えられる」の部分をもとめます。

問二 かつては、個々人が取り組むべき問題だったのに、現在は誰もが取り組むべきなのはなぜかという問いです。その理由は、傍線部の後の18行目から「誰もが環境を悪化させる張本人の一人になり得るし、だから逆に、個々人のささやかな自覚的行為が、事態を悪化させないために是非とも要請されているのである。」の部分に説明されています。理由を聞かれているので、文末は「・・・から。」の形にします。

問三 「食を取り巻く環境問題」とは、2行目の「人間の様々な活動、大規模な活動が、巡り巡って食べ物の安全性を脅かすものとなっている」ことであり、その内容が、繰り返し書かれています。二十字以内の指定があるので、45行目の「人間の食に関わる以外の他の諸活動の結果」の部分をもとめます。

問四 「食に起因する環境問題」とは、46行目の「食物の生産に関わる人間の大規模な活動」の結果、人類の生存環境が悪化することを指しています。つまり、食物生産が原因で環境に負荷をかけることを言っているわけです。ア・ウ・エは食物生産が原因であることが書かれています。食物生産のためではないものを選ぶので、イが答えになります。

問五 現代の食の在り方の解決方法については、62行目に「問題を問題として感ずること」が「解決への第一歩」になると書かれていて、そして、65行目に「問題を問題として受け止めるには、知識を得ることが必要」と書かれています。さらに、知識を得るためには、68行目の「積極的に情報源となり得る人々に向かって、訴える」ことが望まれるとあるので、この三点を盛り込むことが必要です。

問六 脱文の、「コントロールが難しい」という言葉に着目します。「コントロールが難しい」に近い言葉を探すと、81行目に「制御不能」が見つかります。さらに脱文には「いずれも」とあるので、コントロールが難しい内容が並べて説明している箇所を探すと《え》しかありません。

問七 漢字は、基本ですからしっかり勉強しておいてください。

問八

ア「動物の営みとしてみれば実に単純な事柄である食べるということ」(70行目)は「経済の論理」(74行目)や「政治的状況」(76行目)の合成として「制御不能ということも多い」(81行目)が「私たちは、それでも努力」し「努力するに当たって、希望をもつ存在である」(83行目)と書かれていて、該当します。

イ 81行目に「制御不能ということも多い」といっているのに、「今では制御不能になってしまった」と断定することはできません。

ウ 頭での理解にとどまっているのは、身を切るような切実な問題ではないからであり、「解決できると希望をもっているから」ではありません。

エ 本文の前半では、人間の様々な活動によって環境が悪化し、食の安全性が脅かされる問題について書かれているので、選択肢の前半は合致します。しかし、62行目に「多くの問題が、生活の中で身を切る仕方で否応なしに立ち現れるというのではない」とあるので、選択肢の「全てが」の部分が当てはまりません。

2 出典は、豊島ミホ 『夜の朝顔』です。豊島ミホは最近、1980年代生まれの作家として、同世代の綿矢リサ、金原ひとみなどと同様注目を集めつつあります。

毎年、「洸兄」と「マリさん」一家は、主人公である「セン」の家に帰省します。無邪気に楽しい時間をすごしていたのですが、今年の夏はマリさんの一言をめぐって、事件が起きます。田舎ですくすくと明るく育っていると思われるような「セン」にも苦い思い出があり、そうした経験を経て成長していく様子が描かれています。

問一 線(1)の前を見ると、「それは」とあるので、前に書かれている部分であることが分かります。そこには、「イチノセキの一家」と「ウチ」の家族が楽しく食卓を囲んでいることが書かれています。

問二 「二つの家族が一緒になればいい」という私の提案に対し、洸兄は同意してくれませんが、マリさんはそれをあからさまに否定します。そんなマリさんの態度に対し、洸兄は「大人げねえの・・・」(19行目)といっています。洸兄自身も、心の中では二つの家族が一緒になるはずがないと思っているのですが、センの気持ちを思いやって同意してくれていたことがわかります。ですから、そんな洸兄の性格はアの「やさしくて思いやりがある」が該当します。

エについては、文章全体からは健康で頼りがいがあるといえますが、線部のセンとのやりとりからは読み取ることはできません。

また、「大人」になってしまった洸兄が年下の者の気持ちを思いやっていることがうかがえ

る箇所を探しますと、43 行目の「洗兄は大いにウケて、手を叩いて喜んでくれた」の部分が見つかります。

問三 27 行目に「何もない田舎で子守に耐えられた」とあり、マリさんは田舎での日々を飽き飽きしながらも耐えていたのですが、とうとう「四日目」に耐えられなくなって、帰ってしまったことがわかります。心ない言葉は、何もない田舎での子守にうんざりしつつあったから発せられたのです。

問四 空欄の前後から、マリさんの思いがけない言葉をきいて、びっくりした様子が書かれていたことがうかがえます。イの「ぼかんとした」、ウの「ぎょっとした」か、迷いますが、空欄の後に「私も」とあり、「まばたきしかできなかった」とあるので、ウの「ぎょっとした」という恐れまでは抱いておらず、単純にびっくりした様子を選べばよいので、答えはイになります。

問五 慣用句やことわざはしっかりと勉強しておいてください。

問六 「さびし」さの内容をたずねる問いです。マリさんは、爪をピンクに塗ったりしておしゃれに興味があるような年頃ですし、洗兄は、センやチエミに対して面倒見はよいけれど、「どこか心ここにあらず」(38 行目)な様子をしています。つまり、洗兄やマリさんは大人に近づいた結果、センたちとは興味の方向がずれてきていて、一緒に遊びが楽しめなくなったのです。センはそのことに気づいたからこそ、さびしく感じているのです。

問七 風景描写が意味するものを考える問いです。蝉の乾いた死骸、ざっと吹き抜ける風は、洗兄たちのキラキラした思い出が色あせてしまったことを意味しています。したがって、イが答えになります。

アの「全く」は、45 行目に「この先もう何度もここに来てあそんでくれはしないのだ」とあり、全く途絶えるわけではないので、該当しません。

ウの「なげやりな気持ち」はもっていないので、該当しません。

エの「意欲にみちあふれている」の部分は、本文中で喪失感でいっぱいのセンの姿が描かれているので当てはまりません。

問八 今まで、年上の者にかわいがられ、無邪気に楽しく過ごしていたセンですが、この夏の体験をきっかけに、79 行目で、「洗兄がしてくれたように、チエミの手をしっかりとにぎり続けて」います。つまり、これからは自分が面倒をみていこうという決意のあらわれですから、答えはエになります。

アでは、親戚一家の訪問という非日常の出来事に対して疲れは感じていますが、わがままな子に「負担に感じている」わけではないので当てはまりません。

イでは、センたちとの遊びに興味は持てないことがうかがえますが、「うらやましく思っている」とまではいえません。

ウの「力を合わせること」の部分は本文には書かれていないので、当てはまりません。